

体育系教員養成課程における鍵盤楽器指導に関する研究

Research on clavier instruction in physical education teacher-training courses

三小田 美穂子

Mineko SANKODA

1. 研究の方法と目的

小学校教員養成課程ではピアノの学習を取り入れているところが多い。それは、ピアノがメロディと伴奏が同時にできる楽器であり、音楽の要素と構成について実際に体験しながら学習できることから、音楽の基礎的な能力を培うことができると考えられるからである。同様の理由から、学校現場でもピアノを用いて授業をすることが多く、このことに関連して採用試験でも取り入れられることが多い。そこで本校でも基礎的な音楽的能力と知識を得るためにピアノの学習を取り入れている。

ピアノの学習を取り入れる際に必ず提起されるのが個人差の問題である。これはどの小学校養成課程でも取り上げられる問題であるが、ピアノを個人的に習ったことがある学生がどのくらいの割合にいるかどうか、音楽系の部活に入っていたかどうかなど音楽経験の差が授業の在り方に影響する。ピアノを個人的に習ったことのある学生の割合は養成校によって異なる。8割の学生が個人的に習ったことがあるという学校もあるが、ほとんどの学校で経験者の数が半数に満たないことが多く、本校でもその特質からピアノを個人的に習ったことのある学生の割合は少ない。そこで、初心

者への対応と個人差を考慮した指導が求められ、方策を試みてきた。本研究では、1年間受講した学生に基礎音楽の授業に対する意識と指導法に関するアンケート調査を行い、指導法とこれまで試みてきた方策に対する評価と示唆を得たい。

2. 先行文献の分析

梁島らの研究はピアノ指導の実践をもとにして、その目的と学生の実態に合わせた指導の目標・内容・方法などから、初等教員養成におけるピアノ指導のあり方を論じたものである。指導の目標は①ピアノ音楽の体験、②音楽教育の場で応用ができるような種々のピアノ音楽教材の体験、③採用試験を考慮した曲の体験、である。授業形態は学習経験の似ている3～5名によるグループレッスンで、初級・中級・上級の各グループごとに、多面的な音楽的能力を養うことをためにバラエティに富んだ教材を編成し、指導を行っている。その結果、ピアノ技術のみに偏らない、音楽に対する幅広い理解と体験を可能にした。

ピアノの経験のない学生は1～2割なので、初級・中級・上級に分けてレベルごとの到達目標を設定することができる。グループでレッスンすることの利点を生かして、お互いに励まし合ったり、

競争したりして、自主的に考え学び合う場となるようにしている。問題事例が各級ごとに挙げられているが、初級ではやはり譜読みが困難であること、中級と上級では技術や音に対する感覚が十分でないため、音楽的表現に至らないことがあげられている。(梁島 1989)

竹内はピアノ指導の際に見落とされているいくつかの問題点とその取り組み方をこれまでの指導の結果と合わせて考察している。見落とされている問題点として「姿勢と手のかたち」「運指と表現」「譜読み」を取り上げている。

ピアノの経験のある学生でも楽譜を正確に読みとる力が非常に弱く、なぜ正確に読み取ることができないのかを探っている。(竹内 2006)

森らは初心者抱える問題点の一つである、楽譜からの情報とそれらを演奏という行為に結びつける情報伝達速度について考察し、学生が実際に間違えるのはどのような場合なのかを実例を挙げて検討した。実例から分かったのは楽譜からの情報とその伝達という観点から考察しても、その状況は多種多様であり、定まった形での指導はなかなか難しい。しかし、教師は学生の状況を観察、分析し、適切な指導助言を行う事が大切であるとの結論を得ている。(森 2004)

岩崎らは、さまざまな音楽経験を持ち、個人差の大きい学生たちに、教育者として子どもたちに相対していけるだけの内容、方法、技術をどのようにして身につけさせるかという課題に対し、簡易伴奏の習得を中心に指導内容を設定している。授業形態は基礎的な内容を一斉授業で行った後、個別な指導を適宜取り入れている。授業終了後の調査の結果、ピアノ習得の初期段階では簡易伴奏が持っている簡便さが有効に働いたが、音楽表現の幅を制限してしまう事もあることがわかった。そこで、導入期では簡易伴奏を用い、次の段階として本伴奏に移行して音楽の深層に迫る学習展開が必要であると述べている。(岩崎 1989)

梁島らの授業では能力別にグループを分け、自主的に学習できるように配慮しているが、初級で

は読譜に問題があり、中級と上級では音楽的表現に至らないことが問題となっている。竹内と森らの研究でも読譜の能力が問題として取り上げられ、学生が間違える状況は多種多様であり、教師は学生の状況を観察・分析して、適切な助言を行う必要があることが提言されている。岩崎は教育者として子どもに相対していけるだけの知識や技術を身につけさせるために、簡易伴奏の習得を中心に指導内容を設定し、上記のような問題と絡めて解決策を模索している。

2. 学生の現状と指導方法

2.1 目的と内容

基礎音楽の授業は、小学校教員になるために必要な音楽の知識と基礎を身につけることを目的としている。この授業で身につけた音楽の知識と基礎力を前提として、教科教育法(音楽)で指導法の学習を進めることになる。

では、小学校教員に必要な音楽の知識と基礎とは何だろうか。それは音楽の仕組みに関する知識であり、そしてそれを知識としてだけでなく、感覚的にも理解することである。ここで重要なことは知識として身につけるだけでなく感覚的に身につけなければならないということである。音楽の授業の場合は音楽として表現することを促したり、表現されたものを評価したりする行為が主であるからである。

音楽の仕組みに関する知識とは音楽の構成要素とそれからなる構造のことである。音楽の構成要素とは音色、リズム、速度、旋律、強弱、拍の流れやフレーズ、音の重なり、音階や調、和声の響きなどであり、構造とはこれらの音楽の要素が関連からなる反復、問いと答え、変化、音楽の縦と横の関係のことである。

そこで、基礎音楽では、ピアノ演奏、合唱、合奏などの実際の演奏を体験することと、音楽理論の学習を関連付けながら授業を進めることによって、知識としてだけでなく感覚的にも身につける

ようにしたい。音楽について学習する場合、楽器の演奏を習得することは大変意義のあることである。楽器の演奏を習得する過程で音楽の構成要素について理解することを余儀なくされ、また、楽譜とのかかわりを体得できるからである。その中でも特にピアノの演奏を取り入れるのは、弦楽器や管楽器に比べて音が出しやすいく、和音を出すことができること、旋律楽器としても伴奏楽器としても用いられるという理由からである。同様の理由から学習の現場でもピアノが用いられることが多く、現場に対応するという意味も込められている。

2.2 学生の現状

まず最初に学生の鍵盤楽器と音楽に関する現状を確認し、現状に対処するためにどのような指導方針を選択したのかを述べたい。

ピアノを中心とする鍵盤楽器の経験者はだいたい3割未満である。しかし、その中には1, 2年だけ習っていた、演奏したい曲をレッスンしてもらっただけで系統的に習っていないという学生もいて、音楽理論も分かっていて、ある程度きちんと演奏できるという学生は1割にも満たない。

音楽理論は全く分からない学生がほとんどである。レッスンを始める前に音楽理論の事前調査を行うが、毎年、完全に理解している学生は1割程度であり、全く分からない学生は7, 8割に達する。事前調査の内容は音名・階名・音符・休符の呼び方と長さ、音階、拍子であるが、そこから読み取ることのできるの次のとおりである。

- ① 音名と階名について理解していないので、区別がついていない
- ② 音符の長さは少しわかるが、休符の長さ・それぞれの呼び方はほとんどできない。
- ③ 音階、拍子が理解できている学生は1割に満たない

このようにほとんどの学生が音楽理論を理解していないことがわかる。しかし、学生たちは合唱したり、合奏したりすることを好み、鍵盤楽器の

学習にも意欲的に取り組もうとしている。これらの現状を踏まえて、次のような指導の方策を試みることにした。

- ① 個人差に対応する指導
- ② 3人グループを作り、教え合うシステムを取る
- ③ 音楽理論の学習の徹底

次の項でそれぞれの方策について説明したい。

2.3 指導方法

ア 個人差に対応する指導

先述したように全くピアノを弾いたことのない学生と10年以上個人レッスンを受けたことのある学生、ピアノのレッスンの経験はないが、吹奏楽部などに属し音楽的な経験は豊富な学生などその経験と知識はさまざまである。そこで「進行表」を使って指導者と学生の双方が進行状況と課題を意識できるようにした。課題は学生のピアノの経験に合わせて設定し、全くピアノのレッスンの経験がない学生はバイエル練習曲集の44番から始め、少し経験がある学生はこれまで受けてきた個人レッスンでの到達度に合わせてバイエルやブルグミュラーから選曲する。

到達を目標とする課題も学生のレベルに合わせており、達成感を感じながら目標を目指して練習に取り組めるように配慮している。ピアノの上達は練習時間と有効な練習方法に関連する。学生が自ら練習時間を確保し有効な方法で練習できるように、動機づけと有効な練習方法の指導を行う必要がある。レッスンでは上達が見られない場合、各人がどこで躓いているのかを見極めると同時に練習方法についても指導することを心掛けている。

個人レッスンの特質として、各人に合わせたアドバイスと躓きの発見ができる。問題がピアノ演奏におけるテクニックにあるのか、楽譜を読むことに時間がかかる・リズムが分からないなどの音楽理論の理解にあるのか、リズム感などの音楽的感覚にあるのかを見極めることができるのであ

る。そこで、特に指導が必要と思われる場合、授業時間外に指導をすることもある。

イ グループで教え合うシステム

基礎音楽の授業は、音楽理論や合唱・合奏などの全体で行う授業のあとにレッスンをを行うが、レッスンを受ける時間以外は練習室で練習しながら待つことになる。この練習室での練習時間を有効に活用するために、教え合いながら練習できるように3人ずつのグループを組んだ。グループは事前テストや事前調査でピアノの経験がある学生や事前テストの点数の高かった学生がなるべく一人は入るように組み合わせた。しかし、ピアノのレッスンの経験者と吹奏楽などの経験者は全体の3割に満たないことから、経験者を組み入れることのできないグループもあり、配慮が必要となっている。

ウ 音楽理論の学習の徹底

成人の場合、ピアノの演奏を上達させるためには実践と同時に音楽理論を理解することが有効である。ピアノ演奏の未経験者は音楽理論を全く理解していない場合が多く、まず、楽譜の読み方とそれに伴う理論を一から学習する必要がある。西洋音楽では、楽譜の機能を理解し、それを読んで音に変える過程が重要である。進み方の遅い学生は音楽理論が理解できず、楽譜を読むのに時間がかかっていることが原因であることが多い。そこ

で、楽譜を読む力＝ソルフェージュ力が身につけているかどうかを確認し、少し時間がかかっても理論の理解を伴わせながらレッスンを行っている。ソルフェージュ力を身につけるための練習は日常的に繰り返して慣れることが大切であるが、限られた授業時間の中ではなかなか難しいのが現状である。

以上のことから音楽理論はピアノのレッスンと音楽の授業を行うために必要な最低限のことを系統的に繰り返し学習することが必要である。次が基礎音楽で学習する音楽理論の内容である。

3. 意識調査

3.1 方法

質問紙調査

対象 体育学部こどもスポーツ教育学科 1年
100名

実施時期 2011年1月 1年秋期終了時

3.2 結果

学校の授業以外の個人やクラブ活動などで楽器を習った経験があるかとの調査には37%があると答えた。その中でピアノや電子ピアノを習ったことがあるのは27%であり、その他はトランペット、トロンボーン、ホルン、チューバ、ユーフォonium、フルート、クラリネット、サクソフォンといった管楽器が10%、打楽器2%、三味線、

表1 音楽理論の内容

1. 大譜表	ト音記号とヘ音記号の意味 音の高さの示し方
2. 音名と階名	音名(ハニホヘトイロハ) 階名(ドレミファソラシド)
3. 音符と休符	全音符、2分音符、4分音符、8分音符、16分音符、付点音符 全休符、2分休符、4分休符、8分休符、16分休符、付点休符
4. 拍子	4/4 3/4 6/8
5. 音階	ハ長調・ト長調・ヘ長調・イ短調
6. 和音	ハ長調・ト長調の主要3和音
7. 伴奏法	主要3和音を用いた伴奏法
8. コードネーム	メジャーコード、マイナーコード

琴などの和楽器が2%である。鍵盤楽器を習ったことのある学生と管楽器を習ったことのある学生は重複している。

次にピアノのレッスンに対する意識に関しては、小学校教員として音楽にかかわることの必要性から意見を述べたものが多かった。

- ① 小学校の先生は全教科でできなければならない。

低学年は担任が教えなければならない。
音楽を通して、学ぶことがたくさんあるから。
音楽の先生に頼ってはいけない。

- ② クラスで音楽活動をする場合、担任が指導しなければならない。

朝の会や音楽会などクラスで歌う機会はたくさんある。

- ③ 音楽は人の心を豊かにし、全員が一つにすることができる。そのためにクラスにまとまりが生まれる。

子どもたちとのコミュニケーションが取りやすい

- ④ ピアノは音楽の基礎であるから。

- ⑤ 採用試験対策

このように小学校の教員として、教科を教える立場と担任の立場から音楽の必要性を理解していると同時に、学生自身がピアノを通して音楽の技能を身につけ、音楽について学ぶことができることを意識している。

実際にどの程度ピアノの練習を行っているのだろうか。1週間のうちに2日練習するが一番多く45%であり、次に1日が34%である。1日の練習時間は1時間が47%で一番多く、次に2時間が14%である。この結果から、学生は1週間に1日または2日の1時間または2時間を練習時間にあてていることが分かり、そこで、集中的に練習してレッスンに臨んでいることが分かった。

ピアノを演奏することに自体の意識に対する質問に関しては、“とても楽しい”と“楽しい”と答えた学生は82%に上るが、“とても難しい”“難

しい”と答えた学生も88%に上る。この結果から、ピアノを演奏することは難しいと思ながらも、その難しさの中に楽しさを見出していることになり、平易さやおもしろさのみが楽しさにつながるのではないことを示唆している。

ピアノの指導法に関する質問に関しては、88%が“とても満足している”“満足している”と回答している。その理由として、「少人数でやりやすい」「一人ひとり評価をしてもらえる」という少人数グループでの授業方法に満足している回答や「レベルに合わせた指導をしてくれる」「進めるペースがゆっくりで、細かいアドバイスももらった」「アドバイスや練習方法を教えてくれるから」など個人のレベルに合わせた指導方法を評価している回答が見られた。また、「楽譜の読み方が身に付いた」などの理論の学習を評価する回答もみられた。

音楽理論の学習に関する項目では、その必要性和理解度を調べた。ピアノの学習に音楽理論は必要かという問いに対して、強く思うと答えた学生は35%であり、思うと答えた学生は43%である。強く思うと答えた学生と思うと答えた学生を合わせると78%に達し、その必要性は十分に認識されている。しかし、音楽理論を理解できているかという項目に関しては、よくできている4%、できている35%で理解できていると認識できている学生は39%にすぎず、どちらとも言えないが39%に達する。どちらとも言えないという回答は、内容によって理解度に差がある場合と確実に理解できているという確信がない場合とが考えられる。

3.3 考 察

学生に対するアンケート調査から指導法の評価と改善すべき点について考察したい。

学生は音楽の授業を担当しなければならないことと学級経営の立場から、ピアノの学習の必要性を理解している。そして、ピアノは難しいが、楽しいという意識を持って取り組んでいる。練習時間に目を向けてみると1週間に2日練習する学生

は45%、1日は34%であり、1日の練習時間は30分から2時間である。ほとんどの学生は1週間に1時間から2時間の練習時間を確保していることがわかる。しかし、20%強の学生がほとんど練習せずにレッスンを受けていることがわかった。ピアノの上達のためには長時間でなくても定期的に練習時間を確保することが重要である。そこで、練習時間を確保できない理由を探り、心理的な理由である場合は対処する必要がある。

指導法に関する質問には満足しているという評価が多かった。その理由としては、少人数グループでレッスンを行っていること、個人差に対応したレッスンを行っていることがあげられる。しかし、非常に少数ではあるがレッスンに不満を持っている学生いるが、これは個人レッスンの経験があり、かなり演奏できる学生である。演奏経験のない学生がほとんどの場合、このような学生への指導にばかりに目が行き、演奏能力の高い学生をさらに伸ばす指導ができないのが現状である。

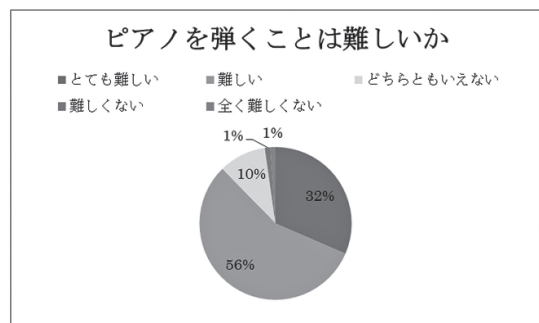
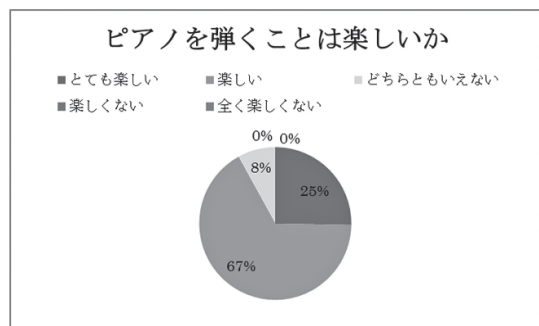
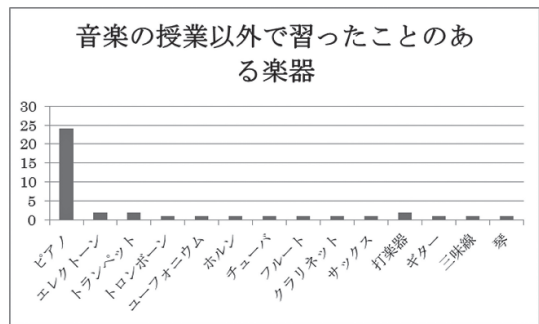
ピアノの学習を促進するために音楽理論の学習を関連させながら進めたが、学生自身はピアノと音楽理論を結び付けることができずに効果は上がらなかったようだ。その理由として、音楽理論を確実に理解するための手立てを取ることができなかったことがあげられる。音楽理論を確実に理解するためには、繰り返して学習し、慣れることが必要である。また、常にピアノのレッスンの際に音楽理論と関連させ、その理解がピアノの上達を促すことを意識させなければならない。音楽理論は理論でありながら、実践と結びつけなければ理解できないものであり、理論と実践を常に関連付け、何度も繰り返して知識と技能の両方として獲得させなければならない。

4. ま と め

学生の基礎音楽の授業に対する意識は高く、小学校教員養成課程における授業の重要性を認識し、前向きに取り組もうとしていることが分かつ

た。指導法に関しても一応の評価を得ることができた。しかし、初心者にとって問題となる読譜に関しては、音楽理論の理解と絡めてさらなる分析が必要であろう。また、体育系の小学校教員養成の特性に合わせた指導法についてはこれからの課題としたい。

資 料



参考文献

- 1) 梁島章子、山崎和子、坂井康子、松井明恵 「初等教員養成のピアノ指導についての研究」 京都教育大学 紀要 No.75 1989
- 2) 岩崎洋一、後藤薫 「教員養成大学における音楽科教育の授業内容に関する一考察」 福岡教育大学 紀要 第38号 第5分冊 1989
- 3) 森正、上田泰子 「教員養成大学のピアノ初心者が抱える問題」 鳴門教育大学実技教育研究 14 2004
- 4) 竹内アンナ 「小学校・幼稚園教員養成のためのピアノ指導法 (1)」 千葉敬愛短期大学紀要 28 2006

